

# 甘藷に救けられた時代

農業技術協会顧問 岸 国平\*

現在の日本人にとって甘藷(サツマイモ)は、イモ焼酎の原料かあるいは焼きいもの材料という印象はあっても、命をつなぐ大事な主食の一部という印象は薄いだろう。しかし少し時代をさかのぼって、太平洋戦争以前のことを考えてみると、サツマイモは大多数の日本人にとって米や雑穀と並ぶ重要な主食であった。今回甘藷のことを題材に何か書けといった機会を与えられたので、そういう時代を生き抜いてきたものの一人として「甘藷に救けられた時代」のことを思い出して記し、責めを果たしたいと思う。

筆者は北関東の一隅赤城山麓の農村で、農家の三男坊として生まれ育ったが、当時その近辺の百姓家では、春先になると年中行事の一つとして必ずどの家でもイモの苗床が作られた。普段は子供たちが陣取りやかくれんぼをして遊ぶ大事な庭の一角で、最も日当たりが良く好条件のところにそれは作られた。何本もの杭や竹、縄、多量のわらが準備され、大人たちが手際よく苗床を作り上げる。家の南面の赤土の崖に作られたむろの中から種イモが出され、厩の馬糞や踏みわらを詰めた上に土を摺き種イモを並べ、その上にもみ殻がかけられれば出来上がりである。そこでできたイモの苗を畑に植え、夏になってつるが畑一面に伸びると、つる返しをするのは子供たちの仕事だった。秋、ひと霜来て葉が黒くなれば楽しいイモ掘りである。十五夜の晩、満月に供える団子や野菜の中の主役はやはり掘っ

たばかりのサツマイモだった。そしてその頃から後はいよいよ新イモが食卓や野良弁当の重要な一員になるのである。

時代は変わって昭和20年8月15日、終戦である。戦地から何百万人もの旧軍人や在外邦人が狭くなった国土の中に帰ってきた。待っていたのは戦争で荒れ果てた国土である。耕せるところは全て耕しても国民すべてを食わせる食料は到底作り出すことは出来なかった。そんな時、今こそわが出番と活躍したのがサツマイモである。畑ならどんな畑にもイモが植えられた。当時日本全体でサツマイモの作付面積がどのくらいであったのか統計資料が不十分でよく分からないが、おそらく現在の十数倍は下らなかったであろう。終戦後の2、3年、もしサツマイモなかりせば、何十万人の人間が餓死したかわからない。毎日何万トンもの残飯が埋め立て地に捨てられるような、恵まれた今の時代からは到底想像も出来ない時代だったのである。あんな時代が来てほしいとは思わないが、もし何らかの事情で突発的な食糧難が来ても、救荒作物としてのサツマイモは、備えさえしておけば偉大な力を発揮してくれるということを、あの頃の教訓ははっきりと教えてくれたのである。為政者も研究者もそのことを決して忘れてはならないであろう。

\* Kishi, Kunihei Phd

1926年生 農学博士 農水省局長・農研センター所長など歴任 勲三等旭日中綬章受賞 著書「日本植物病害大事典」「植物のparasiteたち」など多数